

故久保祐雄日本農業気象学会名誉会員(元会長)を偲んで



在りし日の久保祐雄本学会名誉会員 (元会長)

故久保祐雄名誉会員略歴 (名前の「祐」は年金受給時に「祐」から改変された)	
昭和 2 年 9 月 15 日	鳥取市吉方町で出生
昭和 26 年 3 月	東京大学農学部農学科卒
昭和 26 年 4 月 1 日	農林省農業技術研究所物理統計部気象科 (助手)
昭和 27 年 3 月 1 日	農林省農業技術研究所物理統計部気象科 (農林技官)
昭和 39 年 4 月 16 日	農林省農業技術研究所物理統計部気象科微細気象研究室長
昭和 39 年 9 月～41 年 9 月, 42 年 3 月～44 年 3 月	学術奨励審議会専門委員
昭和 42 年 1 月 16 日	農学博士 (東京大学) 温州みかん樹の寒風害に関する研究
昭和 43～45 年, 47 年	講師 (東京教育大学農学部) 併任
昭和 46 年 6 月 16 日	農林省草地試験場生態部草地生態研究室長
昭和 46 年 7 月 16 日	農林省草地試験場生態部付, 中華民國台湾省気象局派遣 (昭和 46 年 12 月 31 日まで)
昭和 47 年 1 月 1 日	農林省草地試験場生態部草地生態研究室長
昭和 52 年 9 月 16 日	農林省農業技術研究所物理統計部調査科長
昭和 55 年 7 月 16 日	農林水産省農業技術研究所物理統計部長
昭和 58 年 12 月 1 日	農林水産省農業技術研究所環境研究官
昭和 59 年 5 月 16 日	農林水産省農業技術研究所長
昭和 59 年 6 月 30 日	国立防災科学技術センター運営委員併任
昭和 62 年 4 月 1 日	辞職 (勸奨)
平成 28 年 2 月 4 日	没 (享年 88 歳)

日本農業気象学会が戦後活動を始めた直後から会員として、作物気象の研究、特に作物への風の影響に関する研究で大きな業績を挙げられた。また学会の幹事、評議員、会長として、学会の運営・発展に貢献された久保祐雄会員は、2016年2月4日早朝に

彼岸に渡られた。享年 88 歳であった。

故久保元会長 (以降、故人) は 1951 年 4 月に、農林省農業技術研究所物理統計部気象科微細気象研究室に採用され、農業気象の研究に参加された。研究室長は元会長の故坪井八十二博士であった。旧航空技研の風洞用の大型プロペラを転用して農技研に作られた農業研究用の風洞実験室で、ポット栽培の水稻・柑橘に強風を当てて風害の様子を明らかにする

研究に参加され、多くの成果を出された。これらの研究成果をまとめ、「温州みかん樹の寒風害に関する研究」で1967年1月に東京大学から農学博士を授与された。そして1970年4月には「柑橘の寒風害に関する研究」で日本農業気象学会賞を受賞している。また、1971～1977年の草地試験場では、家畜の土と草への働きかけ及び被圧した土と草の問題として、草地の生産力の永続性に関する理論的根拠となる草地生態研究の基礎を築いた。

故人は当面する研究に熱中するほか、新しい研究分野の情報取得にも熱心であった。その一つの表れがロシア文献の輪読会であった。有名な故井上栄一博士の勧めで、気象科内に夜間ロシア文献勉強会が、故人、故今井和彦、筆者・内嶋の3人で組織され、約1年間続いた。お陰で八杉露和辞典を頼りに旧ソ連の気象と農業に関する文献を判読できるようになった。

食料生産への気候変動の問題は、今や世界的な大問題であるが、それは1972/73年における世界的な食料需給の逼迫に端を発している。農林省はこの問題の重要性から、世界食料需給事情調査を実施した。関係専門家を世界の主要地域（北米、南米、欧州、ロシア、東南アジア・太平洋）へ派遣し、実態調査を行った。故人は南米を分担し、立派な報文をまとめた。この報文を基礎として、「世界の食糧と異常気象」が故人と谷信輝会員の編集で発行された（農林統計協会、1982）。これは世界の食料問題を異常気象との関係で分析した本邦初の書物と思われる。本書の編集作業の推進に当たって、故人は、その能力を遺憾無く発揮し各分野の研究者の意見をくみ取り、まとめられた。それは故人の物事の管理運営能力の高さを示す一つの仕事であった。

その高い管理運営能力の高さが遺憾無く発揮されたのは、1970年代に始まる農業技術研究所（北区西ヶ原）のつくば地区への移転大事業の時であった。研究所内の各部各科から選出された移転準備委員会の委員長として、各部各科からの百家争鳴のような意見を手際よく整理して、移転作業のスケジュール作成とその実施に大きな力を発揮された。現在、つくば農林団地にある前身の農業環境技術研究所（現：

農業環境変動研究センター）は、故人を中心とする西ヶ原農技研の移転準備・推進委員会（移転対策本部）の努力の賜物である。その後、故人は農業環境技術研究所の所長につかれ、新しい研究所の研究体制の刷新と整備、それに加えて所内研究者の研究意識の改革に多くの時間を割かれ、多大な成果を残された。そして1987年4月に退官され、36年間にわたる研究者そして研究管理者としての活動に一つの終止符を打たれた。

国家公務員退職後は、海外プロジェクトの中国三江平原農業共同試験場計画（国際農林業協力協会）チームリーダーとしての黒竜江省ハルビン市での推進及び1996～1998年には国際協力事業団のハルビン市方正地区稲作機械化と畜産振興開発計画の推進、そして1991～1997年に毎年、韓国、マレーシア、エジプト、メキシコ、中国、コスタ・リカで事後評価調査を行っている。

その後は、東京都北区上十条の自宅で、好きな読書や基などを友として悠々自適の生活を楽しんでおられた。その中でも後進達の活動にも気を配っておられたようで、筆者・内嶋が2011年気象庁で開かれた気候影響・利用研究会で報告した折り、出席され聞いて頂いた。帰路、コーヒー店でつくば時代の仲間を交えて故人と過ごした一時が忘れられない。また、その前2010年11月に日大で開催された気候影響・利用研究会に参加された時に、筆者・真木は故人と下高井戸駅の近くで昼食を楽しく共にしたのが懐かしい最後の思い出となってしまった。なお、故人の農技研・微細気象研究室長（草地試験場草地生態研究室長への転出前）時代に研究室員であった奥山富子、上村賢治、真木太一より深甚のお悔やみを申し上げます。

長々と記してきたが、故人との60年（内嶋）、45年間（真木）の長きにわたる交友と頂いた指導の暖かさを忘れられない。本当にありがとうございました。地球気候の不安定な活動や世界の不穏な動きを忘れて、谷中の墓地でゆっくりとお休みください。合掌。

（名誉会員 内嶋善兵衛・真木太一）